

2025年3月30日大齋節第4主日

ヨシュア記5章9－12節

コリントの信徒への手紙二5章17－21節

ルカによる福音書15章1－3、11b－32節

本日は、3月の最終日曜日、2024年度最後の日曜日です。わたしたちの日本聖公会は、教会歴に基づいて礼拝を行います、組織としては社会の年度に従っています。わたしたちの教区でも異動があり、山手グループも定任教役者がおられなかったお隣の教会に、4月から執事の方が赴任・定住されます。わたしたちの教会で異動はありませんが、その執事の方が主日に執事の聖餐式をされる時がありますので、2025年度から第1主日と第5主日に朝8時半も聖餐式を行います。さっそく来週4月6日の主日は、8時半と10時半と二回の聖餐式があります。少しだけ変化のある2025年度も改めてよろしくお願いいたします。

さて、本日の福音書は、放蕩息子のたとえとして有名なお話です。『聖書』の小見出しは、新共同訳はその表現の通り『放蕩息子』のたとえ」となっていますが、新しい聖書協会共同訳は、『いなくなった息子』のたとえ」となりました。そのように小見出しが変わった理由は、どちらが正解かということではなく、この部分について、たとえ話の内容にだけ注目するのではなく、このたとえ話がルカ福音書全体の流れの中でどのような位置にあるかにも注目したからでしょう。このたとえ話は、明らかに三つのたとえ（いなくなった羊、なくなった銀貨、いなくなった息子）の最後に位置するようになっています。それまでの聖書日課は、ルカ15章11から32節だけであったのですが、新しい聖書日課は、15章1から3節が加わっています。おそらくその全体の流れを意識してのことと思います。

新しい日課で読むこととなった1節から3節には、「**徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、『この人は罪人たちを受け入れ、一緒に食事をしている』と文句を言った。そこで、イエスは次のたとえを話された**」とあります。ここにイエス様が三つのたとえを語る理由が書かれています。福音書のそれまでの流れの中で、ローマ帝国のために働くので人々から嫌われていた徴税人、律法を守らないことで人々から批判されていた罪人、そのような人々がおそらく心を改めてイエス様の話を聞こうとされ、イエス様はその人々と食事を通じた深い交わりを持っていたのです。そのことについて律法を守ることを通して、信仰的にも社会的にもまじめに生活していたファリサイ派の人々やその律法の専門家たちが不平を言ったから、イエス様はたとえ話をされたのです。ただし、それまでの流れといっても、ルカ福音書の中で、イエス様が徴税人や罪人と食事をしているお話が、何度も描かれているわけではありません。明確なのは、5章27節から32節の「(徴税人) レビを弟子にする」お話のなかで、「**そして、自分(レビの)の家でイエスのために盛大な宴会を催した。そこには徴税人たちやほかの人々(含罪人)が大勢いて、一緒に食卓に着いていた**」(ルカ5:29)とあるだけです。おそらく、同じような食事をイエス様は何回もなさっていたということでしょう。

また、そうであるがゆえに、ここで気を付けなければいけないのは、ルカ福音書

は、イエス様がただ交わりのための食事をしていただと描いているわけではないということです。徴税人レビのお話を基とするならば、彼が他の弟子たちと同じように、イエス様から「私に従いなさい」と言われて、「何もかも捨てて従った」からです。そのようになるには心を改めるという事柄があります。それは、表現を変えれば、「悔い改めて」あるいは主なる神様に「立ち返る」ことです。そのことを強調するのが、ルカ福音書の特徴でもあります。

その特徴を前提と考えるとき、15章にある三つのたとえ（見失った羊、なくした銀貨、いなくなった息子）も、悔い改め、主なる神様に立ち返ることの尊さを示していることがわかります。ことに、その元ある数となくなったもの（もどってくるもの）の数の比率の変化、100のうち1、10のうちの1、2のうちの1という変化は、その戻ってくることの尊さを強調していることがわかります。ただし、見失った羊のたとえは、マタイにも同じたとえがありますので、それだけ独自に解釈されることが多いのですが、ルカの文脈では、すべて悔い改めること、立ち返ることの尊さの強調にあります。

ただし、悔い改めること、立ち返ることの尊さと言いましても、さらに大切なことがあります。それは、そのことを待ち続ける方がおられるということです。その方とはもちろん主なる神様のことです。最後の「いなくなった息子」のたとえは、その主なる神様の姿を、父親が明らかに表現しています。もっとも、13章の『実がならないいちじくの木』のたとえでは、三年実がならない木を倒そうとする話がありますが、園丁が介入して一年待つことになります。その意味では、永久に何起こらなくても、主なる神様はなにもしないで待ち続けると、ルカの著者は考えているわけではないようです。

ファリサイ派の人々や律法学者たちも、その主なる神様の愛を知らないわけではありませんでした。また、徴税人や罪人たちが心を改めること、主なる神様に立ち返ることを望んでいないこともなかったと思います。ただし、それには自分たちが示す方法があると考えていたのでしょう。その方法でなければ、悔い改めたことにならないと考えていたのでしょう。イエス様を信じるわたしたちの教会も、主なる神様に立ち返るには、教会の方法しかないと言ってしまう時、同じようになってしまいます。またそのような歴史もありますが、エキュメニカル運動がなかなか進まないことも、そこに関係があるのでしょう。しかし、『聖書』が求める事柄、ことに本日の箇所が求める事柄は、単に戻るための新しい方法の提示ではありません。それらのたとえが示しているのは、すべて戻ってくることを待ち続ける、すべての人が立ち返ることを待ち望み続ける主なる神様の愛です。

すべての人が立ち返ることを主なる神様が待ち続けておられる、それは、表現を変えれば、人の住む地上に悲しむ人が一人もいなくなることを待ち続けておられるということです。そんな理想が本当に実現するのか、ことに人間同士の争いが終わらないとき、そのように痛感します。しかし、イエス様は、人間としての十字架の苦しみと、新しい人間として復活の姿を通して、死という絶望を超える希望があることをわたしたちに示します。その希望を多くの人々とともに確認し、お祝いするのが復活日です。その日を迎えるために、今、主なる神様の愛を平和の中に実感できるわたしたちは、その愛の尊さをより大切にしていきたいと思います。